

Ⅵ 漁況海況予報調査

Ⅰ 調査目的

この事業は沿岸、沖合漁業に関する漁況、海況の調査研究および資源研究の結果にもとづいて予報を実施するとともに漁況海況情報を迅速に収集、処理することにより、漁業資源の合理的利用と操業の効率化を図り、漁業経営の安定に役立てることを目的とする。

Ⅱ 調査内容

1. 調査期間 昭和49年4月～50年3月
2. 調査海域 日本海、津軽海峡、太平洋の青森県沿岸および沖合
3. 担当者 技師 十三邦昭・中田凱久
4. 調査船 幸洋丸（121.22トンD 400馬力）・東奥丸（134.47トンD 650馬力）
瑞鷗丸（40.81トンD 170馬力）・青鷗丸（19.94トンD 170馬力）
5. 調査項目
 - (1) 海況調査（定線海洋観測）
 - イ 各層測温、塩検 0, 10, 20, 30, 50, 75, 100, 150, 200, 300, 400, 500 m（但し沿岸定線は300 mまで）
 - ロ 魚卵、稚仔採集及び査定
 - ハ プラクトン採集及び査定
 - ニ 気象観測 天候、気温、風向、風力、気圧、雲量
 - ホ 海象観測 波浪、うねり、水色、透明度
 - ヘ 見張調査
 - (2) 漁況調査
 - イ 県内主要9港（沢辺、深浦、鯨ヶ沢、小泊、三厩、佐井、大畑、白糖、八戸）における主要8魚種（スルメイカ、サバ、マグロ、ブリ、タイ、ヤリイカ、サクラマス、アブラツノザメ）について漁獲量を調査した。
6. 調査方法
 - (1)は試験船により1, 2月を除く毎月1回調査を行い分析及び整理は本場内で行った。
 - (2)は各地区担当の普及員から毎月報告を受け、必要に応じて電話又は現地におもむき調査した。

Ⅲ 調査結果

1. 海況

(1) 日本海

対馬暖流の北上流量（青森県釧作崎沖）は5～7月は平年より多かったが、8～9月、12月は逆に少なかった。

また、暖流域の中心水温は全般に春先の3月から夏季の7月頃までは各層とも平年並か、やや高目に経過したが、8月以降は0～50m層水温が平年よりやや低目の傾向を示し、特に8～9月の50m層水温が低かった。しかし、100m層では月により高低があるが大体平年並であった。

沖合冷水域（100m 5℃）の外縁位置は、平年よりやや離岸傾向を示した。

以上の状況から全般に対馬暖流の勢力は5～7月は平年よりやや強勢であったが、8月以降はやや弱勢であったものと思われる。

(2) 太平洋

津軽暖流の尻矢崎における張り出しは7月頃まで狭かったが、8月以降はやや広がっている。

平年に比較して6～7月頃は若干狭かったようであるが、9月には逆に広いようで全般的に平年並と思われる。また、津軽暖流の張り出し面積（100 m層における津軽暖流域面積）も例年より7月は非常に狭く、9月はやや広がっているようであるが、その外の月は平年並とみられる。

津軽暖流の中心水温は6月はやや高日、8月はやや低目であった外は大体平年並であった。

親潮第1分枝の接岸は本県沖では8月頃まで顕著であったが、9月以降やや離岸し、平年のパターンを示した。全般に平年に比較してやや強勢であったのではないと思われる。

尻矢崎、鮫角両定線及び146°E線に囲まれた海域における親潮域の面積（100 m 8°C以下）を計算すると（6月、8月、10月）6月は9,600平方浬で平年（43～48年）より最も広がっているが、8月は6,100平方浬で最も狭くなっている。

本県の近海に張り出す黒潮分脈は6月頃から認められた。

2. 漁 況

(1) 日本海

1本釣の沿岸漁場におけるスルメイカ漁は、夏季は1,245トンでここ5ヶ年間の最低であった。また秋季も440トンで例年の50%程度と不振であった。しかし、沖合漁場（主として海山沖漁場）の漁獲量は漁獲努力量の増大などで昨年、一昨年並の2,117トンの漁獲をあげた。一方、定置網ではブリ、マダイなどは余り目立った漁はなかったが、メジマグロ、サケなどの好漁が目立った。この外、マイワシが50年1月に入っても乗網がみられる等近年にない珍しい現象を示した。底びき網ではアブラツノザメの好漁が目立ったが、棒受網のヤリイカは昨年に引き続き、大不漁である。

(2) 津軽海峡

大畑近海における夏イカは5,192トンでこれまで最も不漁であった昨年よりは1,200トン程上廻った。

また秋イカ漁は時化などの影響で1,217トンの漁獲よりなく、近年では最も不振であった。

なお、日本海などの搬入イカは6,348トンでこれまでで最も多かった。この外海峡内のブリ、マグロも殆んどみるべき漁がなく、定置網のヤリイカも日本海同様不振に経過した。

(3) 太平洋

八戸近海の夏季におけるスルメイカは4,627トン、秋季は1,075トンでともに昨年の大不漁よりは上廻る漁獲をあげたが例年より著しく不振で依然として来遊資源の回復はみられていない。

また、搬入イカ（氷蔵イカ）も年々少なくなってきたが、凍結船の漁獲量は年々増加し、49年には5万トンを越える水揚を示した。この中ニュージーランド沖で操業のイカが7,900トン含まれ、注目されているが49年の新しい現象としてバカイカ（アカイカ）が多く水揚（推定1,600トン）されているのが注目される。

マサバは道東沖水揚が21,000トンでかなり、減少したが三陸沖では199,000トンでここ4～5年と同水準で経過している。サンマは昨年の19,600トンの好漁から一転して1,290トンの不漁に落ちている。

（詳細は漁海況報告書参照）